科学と信用

1

最近は、科学に対する不信が広まっているようである。放射性物質によって汚染された水は、適切に処理すれば安全だ、と言っても、科学者の言うことは信用できない、という反応が返ってきたりする。しかし、放射性物質が危険であるという知識も、科学者によってもたらされたものではないのか。放射性セシウムを含む水が危険であるという知識は、その水を見ただけでは得られないだろう。

つまり、科学は信用できない、という人は、本当に科学を信用していないのではない。それは危険である、という情報は信用するが、それは安全である、という情報は信用しない、というだけである。

それは自然な反応である。たとえば、犬を散歩させているときに、はじめて通る道で怖い思いをさせると、その後しばらくの間は、その道を通るのを嫌がるようになる。それは危険である、という情報は、人の記憶に強く残る。そして、一度危険と認識したものを、実際は安全である、と認識し直すまでには、いくらかの時間がかかるのも事実である。しかし、人間は犬ではない。人間には、他人を信用するという能力がある。

科学は、信用によって成り立っている。他人の感覚を信用することで、科学的な知識の蓄積は可能になる。たとえば、メスフラスコの値は、誰が読んでも同一である。少なくとも、それが同一であると信じなければ、科学は成り立たない。あらゆる科学実験を一人で行うことは不可能である。ゆえに、他人の実験結果を信用しなければ、科学を作り上げることはできない。

もしも、誰も科学者の言葉を信用しなくなれば、科学というものは存在しなくなるだろう。そのとき我々は、完全な無知の中に閉じ込められてしまう。

科学を信用するということは、自分が直接経験しなかったことについて、他人の意見を信用するということである。それは、人間の理性そのものである。

2

また、感情と理性を対立するものとして捉える議論も、最近ではよく耳にする。しかし、感情と理性は無関係である。感情的であることが理性的であることを妨げるわけではないし、理性的であることが感情的であることを妨げるわけでもない。

感情的である者が、同時に理性的であることは可能である。

感情的である者が、同時に理性的でないことは可能である。

感情的でない者が、同時に理性的であることは可能である。

科学と信用

感情的でない者が、同時に理性的でないことは可能である。

ここに、理性的な人がいたとしよう。もしも彼が、この社会で不正が行われていることを発見したならば、彼は怒るべきである。ある人が理性を持っているのに、その理性にふさわしい感情を持ち合わせていないならば、その人は本当の意味で理性的であるとは言えない。怒りを伴わない理性は無価値である。

資本主義の精神

仕事を効率的に行うことに価値があるわけではない。効率的に金を稼ぐことに価値があるわけではない。世の中にとって必要な仕事を行うことに価値がある。報酬はその結果として生じるに過ぎない。

勤勉は美徳である。しかし、それが唯一の美徳であるわけではない。勤勉な泥棒もいるかもしれないが、その勤勉さに価値はない。世の中の役に立つ仕事には価値があり、そうではない仕事には価値はない。金を稼ぐことが無条件によいことであるならば、泥棒もよいことをしていることになる。そんな馬鹿な話はない。

プロテスタンティズムでは勤勉と蓄財を美徳とするようだが、それは美徳でも何でもない。問題は、どのような仕事によって財をなしたか、ということと、その財をどのように使うか、ということである。稼いだ金を己一人のために使うのであれば、金を稼ぐことはよいことではない。もちろんそれ自体は悪いことではないが、決してよいことでもない。

キリスト教徒は、罪悪感から逃れるために仕事に打ち込む。その様はほとんど偏執的である。反対に、仕事に打ち込めない人間は罪悪感に苛まれることになる。まったく異常なことである。仕事をしないことがなぜ悪いのか。何の罪も犯していないのに。

キリスト教徒の異常さは、原罪から逃げるために常に努力を続けようとするところにある。それは逃亡犯に似ている。彼らがいったい何を恐れているのか、何を忘れようとしているのか、私には皆目見当がつかない。

「小人閑居して不善を為す」という言葉がある。これは裏を返せば、大人は閑居しても不善を為さない、ということである。自分が大人であるという自覚があれば、暇を恐れる理由はない。自分が小人であると思うから、暇を恐れる。すべてのキリスト教徒は小人なので、絶えず閑居を恐れている。彼らは大人になる方法を知らないのである。

原罪など存在しない。それは心のねじくれた人間のたわごとに過ぎない。キリスト教徒は放っておけばどんな罪でも犯すだろう。それは事実、あらゆる犯罪の原因である。

反出生主義

1

子どもを産むことで何らかの責任が生じる、と考える人がいるようだが、産みたくなければ産まなければよい。社会における出生率の低下は、それとは全く別の問題である。

子どもを産んで育てることは、普通の人間にとっては幸福である。そういう人が普通に子どもを産める社会を作るということは、とうぜん必要なことである。だからといって、すべての人間が子どもを作らなければならない、ということにはならない。

産みたくなければ産まなければよいが、産みたい人にとって産みやすい社会を作るべきである。なぜならば、そのような社会でないと持続性がないからである。そのような社会において、子どもを産めるのに産もうとしない人間が肩身の狭い思いをするからといって、文句を言うべきではない。それはただのわがままである。

あらゆる人間にとって何一つ不満がない社会を実現することは、不可能である。人間が生きていれば様々な不都合があるのは当然で、そういうことでいちいち政治家に文句を言ったり、誰彼かまわず不満をぶつけたりするべきではない。

人生において最も重要なことは忍耐である。よりよい社会を実現するために必要なものも忍耐である。わがままな振る舞いからは何も生まれない。

2

私自身は、仕事をするつもりもないし、子どもや家族を作るつもりもない。それが私にとっての幸福だからである。

しかし、たとえば世が乱れ、社会から秩序が失われれば、私も生きづらくなるだろう。だから、私は秩序ある社会の建設のために努力する。それが結局は、私自身の幸福にもつながるからである。

3

世の中には四つの行いがある。

一つ目は、自分のためにもならないし、他人のためにもならない行い。

二つ目は、自分のためにはならないが、他人のためにはなる行い。

三つ目は、自分のためにはなるが、他人のためにはならない行い。

四つ目は、自分のためにもなり、他人のためにもなる行いである。

これら四つの行いは全て現実に可能なものであるが、私が目指すのは四番目の行いである。

しかし、知恵の劣った者どもは、これら四つのうち一つだけ、あるいは二つだけ、三つだけが可能であると考える。彼らにそう考える根拠を尋ねても、意味のある答えは返ってこないだろう。それはただの思い込みであるから。これを無明と言う。

四番目が不可能であると考える人は、自分がやりたくないだけである。自分が楽をするために、それが不可能であるとか、実現可能性が薄いとか、様々な理屈をこねて人を説得しようとする。彼は、世の中の人間全員が怠惰になれば、自分が怠けても誰にも咎められない、と考えている。だから、人にも怠惰を勧めようとする。そういう人間をキリスト教徒と言う。

警察について

最近、警察官が拳銃を奪われるという事件をよく耳にする。このような場合、問題は犯人ではなく警官の側にある。なぜならば、暴漢に襲われて黙ってやられてしまうような人間に、警察の仕事が務まるはずはないからである。

しかし、世間からは警察を非難する声は出ず、むしろ被害にあった警官に同情的ですらある。これは大きな問題で、市民が甘やかすから、警察はつけあがって何もしなくなってしまう。

警察は武力組織である。ゆえに、武力において一般市民に後れを取

るようではまずい。もしも警察がたるんでいるようなら、我々がそれを正さなければならない。この事件の警官がどうなったのかは知らないが、厳しい懲戒処分が必要であろう。

暴漢に刺されて死んだ警官に同情する必要はない。それはむしろ、非難されるべきことである。市民の命を守る力を持たない警察は、ただの税金泥棒である。

比喩について

1

ＴＨＥ　ＢＬＵＥ　ＨＥＡＲＴＳに、『リンダリンダ』という歌がある。その中に、「ドブネズミみたいに美しくなりたい」という歌詞が出てくる。これはずいぶんな言い草だと思っていた。

ここで彼らが言わんとしていることは、自分の心はドブネズミよりも汚い、ということであろう。自分の心に比べれば、ドブネズミの方がはるかに美しい、という意味である。

しかし、汚いのはドブネズミの外見であって、ドブネズミの心が汚いわけではない。したがって、これは不正確な比喩である。本来は、彼らの心と、ドブネズミの心を比較するべきものである。

たとえば、次のような表現があったとしよう。

「彼は腹の黒い男だ」

これを、次のように言い換えてみよう。

「彼の腹は、黒人のように黒い」

この表現は、たしかに差別的ではない。しかしここには、差別につながりうるような、ある種の曖昧さが含まれていると思う。そして、この表現は、比喩の形としては、先ほどのドブネズミの例と同じである。本当ならば、彼の心と、黒人の心を比較するべき場所なのに、それを黒人の皮膚の色と比べてしまっている。このような不正確な比喩が、差別の原因となっている場合があるのではないか。

もちろん、だからといって、『リンダリンダ』がドブネズミへの差別を助長している、と言うつもりはないが、歌を作るほどの人間は、比喩に対してもう少し繊細な感覚を持ってほしいと思う。

2

では、正確な比喩とは何だろうか。たとえば、次のような表現を考えてみよう。

「彼の心は、雲一つない青空のように爽快であった」

この場合、彼の心と、無機物である空とを比較しているのであるから、正確な比喩とは言えないのではないか、と考える人がいるかもしれない。

私が思うに、この比喩は正確である。そもそも、人間の心は、人間の中にあるわけではない。青空を見たときに、気持ちがよいと思うその感情は、青空の中にあるのであって、我々の身体の中にあるのではない。ゆえに、人の心を空模様で表現することは間違いではない。

理科の授業でよく言われることだが、単位の違うもの同士をイコールで結んではいけない。たとえば、一キログラムの重りと、一メートルの物差しは、どちらも一という数字で表現されるが、その一という数字が意味するものは全く異なる。これと同じことが、普通の単語にも言える。

汚いという言葉が、見た目の不潔さを言うこともあれば、心の貧しさを言うこともあるし、雑菌がついているかもしれない、という意味

を含んでいることもある。
　そのように、一つの言葉には、様々に違った意味合いがあるのであって、同じ単語を使っているからといって、その意味を無造作に結び付けてはいけない。そういう大雑把な比喩が、まずい比喩である。西洋人はそういった比喩を、文学的な表現だと言って面白がるかもしれないが、我が国の詩文はもっと繊細である。文学というものは人の心を育てるものであるから、しっかり勉強してほしいものである。
　アウシュビッツ以後、詩は野蛮だ、と言った人がいる。私に言わせれば、それ以前からヨーロッパの詩は野蛮である。感覚的な快楽を追求するその表現はたしかに美しいが、中身は空っぽである。ヨーロッパがモンゴル人によって征服されなかったことは、彼らにとって最大の不幸であろう。

3

　中国では昔から、詩は心だと言う。それは、詩が詩人の心を表現している、ということではなく、むしろ、詩こそが心である、という意味であろう。つまり、詩の中にこそ人間の心はあり、詩の外に心というものは存在しない、ということである。
　ここでは言葉と人間の関係が逆転しており、それが中国詩の特徴であるように思う。日本における歌は、それとも少し違う。

浄土について

1

　浄土、浄土と言っても、浄土という言葉に対応する実体がどこかにあるわけではない。
　すべての言葉は空であって、中身がない。ある言葉に意味があるということは、その言葉に対応する何らかのものが存在する、ということではなく、その言葉が何らかの働きをなしうる、ということである。
　ソシュールの記号論では、記号の表現と、その記号が指示する対象が一対一で対応すると考えられている。彼は、記号の世界と対象の世界という二つの世界を仮定し、それらの間の関係を考察しようとする。それは、記号に関する静的なモデルであり、一種の二元論であると言える。
　一方で、パースの記号論においては、記号の表現とその対象の他に、解釈項というものが仮定されている。これは大雑把に言えば、記号を解釈する人間のことである。
　記号が意味を持つのは、それを解釈する人間がいるからである。この当たり前の事実を理論的に表現したのが、解釈項という概念である。この考え方が、パースの記号論を非常に複雑で奥深いものにしている。
　たとえば、みかん、という言葉が意味を持つのは、我々が、みかんが何であるかを知っているからである。つまり、みかんという言葉には、我々にみかんを思い起こさせるという働きがある。それが、みかんという言葉の意味である。
　みかんという言葉は、あらかじめ、何らかの神秘的な形で現実のみかんと結びついているわけではなく、我々自身が、その音の並びを、

みかんと結びつけているのである。このように、記号を解釈する過程が存在することで、はじめて記号は意味を持つ。それが解釈項の働きである。

記号の本質は、その表現の中にあるのではなく、それが指示する対象の中にあるのでもなく、その記号が何を意味しているのか、ということを解釈する過程の中にある。そのようなダイナミズムとして記号を捉えようとすることが、パースの記号論の特徴である。

このような考え方をするならば、浄土という言葉の意味は、その言葉が我々にどのような働きをなしうるのか、あるいは、その言葉が我々をどのような働きに導くのか、という点にあることになる。つまり、浄土について考えるということこそが、浄土という言葉の意味である。

この場合、実際に浄土というものが存在するかどうか、ということは本質的な問題ではない。そうではなく、浄土について考えることによって、あるいは、どのようにすれば浄土に往生できるのか、ということを考え、その手だてを実践することによって、その人の生き方そのものが変化してゆくということ、その過程が浄土という言葉に意味を与えるのである。

もちろん、実際に浄土はある。お釈迦様がはっきりとそうおっしゃっているのであるから、それを疑うべき理由はない。しかしながら、言葉の性質をより詳しく追及してゆくときには、ここで述べたようなことも考えてみなければならない。

ざっくり言えば、浄土という言葉が意味するものは、諸悪莫作である。それだけである。あらゆる仏の教えの意味は、諸悪莫作に尽きている。

2

ハイデガーや旧世界の思想家たちが、パースを理解できなかったのは当然である。なぜなら、彼らはガチガチのキリスト教徒だったからである。

もちろん、パースもキリスト教徒ではあったが、かなり進歩的なキリスト教徒だった。彼に、もっと仏教について知る機会があったらよかったのに、と思う。

地球温暖化と経済活動

1

温暖化を止めることはできる。具体的な方法は分からないが、人間が引き起こしたことなのだから、人間の取り組み次第でどうとでもなる。

まず、貨幣至上主義をやめるべきである。経済的な利益の追求が環境破壊の原因であることは分かっている。しかし、経済そのものが悪いわけではない。経済活動とは人間の生活そのものであり、それは否定されるべきものではない。問題は経済の在り方である。

経済活動とは、お金を稼ぐことではない。経済的な利益とは、売上額を増やすことではない。数字を増やすことが利益だと考えることが、いびつな経済を生む。

西洋的な経済観は、貨幣の増殖が利益であると考える。貨幣が実在し、それが価値を持つと思うから、それが増殖すると得をした気分になる。そして、一部の人々は貨幣の増殖に取りつかれ、それが経済活動であると思い込む。彼らは、そこにどんな意味があるのか、とい

うことを考えようとしない。貨幣に価値がある、ということは彼らにとって絶対的な命題であり、それを否定することができなくなってしまうのである。

しかし、冷静に考えるならば、本当に価値があるのは貨幣ではなく、貨幣を交換することによって手に入る商品の方である。具体的に言えば、金ではなくて米に価値がある。肉に価値がある。野菜に価値がある。金は食えないが、米は食える。金は味がしないが、米はうまい。それがものの価値である。

こういう当たり前のことが理解できないほど、理性がねじ曲がってしまった人というのが結構いるらしい。経済学はユダヤ教に似ている。それは宗教である。実際には何の価値もないものに、絶対的な価値を見出す異常者である。

我々は、温暖化の問題を解決する前に、まずこの病気を治療しなければならない。彼らが現実を受け入れられるようにするために、何をすればよいのか、よく考えてみるべきである。

私はユダヤ人を差別するつもりはない。ただ、その宗教は間違っている、と言いたいだけである。ユダヤ人の遺伝子に問題があるわけではなく、その宗教に問題がある。その奇妙な宗教のせいで様々な迫害を受けてきたにも関わらず、彼らがいまだにそれを捨てようとしないのは、不思議なことである。

2

温暖化の原因は二酸化炭素である。大気中の二酸化炭素の量を減らすためには、二酸化炭素の排出量を減らすべきである。最もよいのは、人間の数を減らすことであろう。

二酸化炭素は、動物の呼吸によって排出される。まず、人間が排出する二酸化炭素があり、また、家畜が排出する二酸化炭素がある。また、ごみや燃料を燃やすことによって、二酸化炭素が排出される。

一方で、植物は二酸化炭素を吸収する。ならば、肉食をやめて植物食をするようになれば、そのぶん家畜が減り、植物の栽培が増えるので、二酸化炭素の削減につながるかもしれない。だがおそらく、農地よりも自然林のほうが、二酸化炭素の吸収率は高いだろう。そうするとやはり、人間の数を減らしたほうがよい、ということになる。

聖書には、「産めよ増やせよ地に満ちよ」という言葉がある。これは神の言葉である。そのため、キリスト教徒にとっては、人間の増殖は至上命題である。だが、それが必ずしも人間の幸福につながるとは限らない。

聖書に記された神の言葉は、必ずしも正しいとは限らない。それが、本当は神の言葉ではないからなのか、それとも神も間違いを犯すからなのか、あるいは神が嘘をついているからなのか、どんな理由があるのか知らないが、それが正しいという根拠が欠けているので、私はそれを信じない。ゆえに私は、人間の増殖がよいことであるとは思わないし、それが必要なことであるとも思わない。

人間は別に増えなくともよい。地球温暖化の第一の原因は、人間の増殖である。これを真剣に考えなければならない。

生殖の抑制、と言うと、非常に危ない感じがする。しかしそれは、現代のキリスト教的な文化が、生殖に対して極端に積極的であるために、仮に必要とされているだけである。

我々はあまり増えすぎないほうがいいし、恋愛や性愛を絶対視しないほうがいい。父母の役割を特別視する必要はないし、親子のつながりをそこまで重視する必要もない。とくに、精神分析というものは非

常にまずい。あれは結局、「産めよ増やせよ」を実現するための手段に過ぎない。フロイトはヤハウェの走狗である。

温暖化を止めるためには、精神分析の影響をこの社会から取り除く必要がある。冗談のように聞こえるかもしれないが、真面目な話である。

3

温暖化の影響で、台風や豪雨の被害が増えている。令和元年の台風十五号による被害、とくに千葉県における大規模な停電は、我々の社会が、このような災害に対応しきれなくなっていることを示している。

既存の社会的なインフラは、現実の社会と対応しなくなっている。房総半島にも、昔はもう少し多くの人が住んでいたのだろう。その頃に作られた送電ネットワークや水道設備は、現在の千葉県の税収では維持しきれなくなっているのではないか。

我々は、日本社会そのものを根本から作り替えねばならない。社会設計の基本思想を改める必要がある。

現在の日本では少子化が進んでいる。それはおそらく、過度に増えすぎたせいである。人口の上限は、その時の農業技術や工業技術の程度に合わせて決まってくるはずである。一時的に増えすぎた人口は、やがて縮小するが、その後、反動して一定の値で落ち着くだろう。

もちろん、これはただの予想である。しかし、将来に対する何らかの予測を持たなければ、合理的な社会設計は不可能である。

日本の人口がどこまでも増加し続けるはずはない。しかし、高度成長期の日本社会は、そのような前提の下で設計されていた。そして今や、その前提が誤りであることが明らかになった。ゆえに我々は、将来の人口動態に対する新しい見通しの下に、新しい日本社会を設計せねばならない。

第一に必要なのは、効率的なインフラである。日本全国一律で、同じ水準のシステムを全ての世帯に提供するということは、非効率的である。それぞれの土地に合わせたやり方で、効率的なインフラシステムを設計、敷設しなければならない。そのために、地方自治体は、これまで以上に大きな政治的能力を持つ必要がある。

地方分権ということは、これまでも盛んに言われてきた。だが、それが何を意味しているのか、私にはうまくイメージできない。それは、幕藩体制のようなものだろうか。江戸時代の封建制は、地方分権の見本のようなものである。

明治政府による中央集権制は、強力な近代国家の創造を可能にした。そして、その体制はいまだに続いていると言える。この百五十年間は、全体がいわば明治時代とでも言うべきものであり、現在我々が進めようとしている地方分権は、それが持つ本来の意味からすれば、その明治体制を破壊するようなものであり、また、そうでなければならない。

明治国家は、その本質としてやはり、「産めよ殖やせよ」の国家であった。我々はいま、そこから脱却しようとしている。人間社会の新しいモデルを探し出すべき時である。

最後に一つ注意しておくが、これは別に「スピード感を持って」やるべきことではない。物事は進むときには勝手に進むので、状況を見て臨機応変に対処すればよい。

4

東亜連盟は、もしかすると一種の幕藩体制かもしれない。中心に天皇がおり、その下に日本や中国、ロシアなどの国家が、対等な立場で所属する。その日本の中にもう一つの幕藩体制があり、各地方において自治政府が政治を担当する。

その全体をつなぎとめるものは何であろうか。参勤交代であろうか。それとも、天皇陛下の天下巡遊であろうか。

天皇が武装を持たないということは、むしろよいことであるようにも思える。自衛隊関連法によれば、自衛隊の指揮権は内閣総理大臣にある。つまり、自衛隊は内閣の軍隊であって、天皇の軍隊ではない。天皇陛下は、一切の武力を持たないからこそ、国家連合の中心としてふさわしいのではないか。

そもそも、天皇は日本人だけのものではない。天下万民のためにいらっしゃるのである。天皇陛下は、世界人類統合の象徴でなければならない。

サンマについて

1

海洋資源の利用については、国際的な協調が必要である。

現在の国際社会においては、領海や排他的経済水域というものが設定されていて、その範囲内であれば、主権国家は好きなやり方で海洋資源を利用してよい、ということになっている。また、公海上では、どこの国がどれだけ魚を取っても構わない、という決まりである。

しかし、海というものは全てつながっているので、こういうやり方は大雑把すぎる。公海上で中国漁船がサンマを大量に獲ってしまえば、日本近海にはサンマが来なくなり、日々の食卓からサンマがなくなってしまう。牛や豚ならば、柵で囲って、自分の牛と他人の牛を明確に線引きできるが、魚はそうはいかない。海洋資源の利用に関しては、現在の国際社会のルールは個人主義にすぎるのである。

自国の領域でなら何をしてもよい、というのは、国家レベルの個人主義である。陸上では、それもある程度は機能するだろうが、海洋上では上手くいかない。そこでは、国家間の協調が不可欠である。

必要なのは、日本や中国、台湾などの東アジア諸国が、協力して海洋資源の調査を行い、地域ごとに漁獲量制限を設けることであろう。

2

いったい、海洋における主権者とは誰なのか。誰がサンマの命に対して責任を負うのか。

そもそも漁業者の組合は、どうして国家に所属しなければならないのか。海洋上の問題については、国家ではなく、漁業者が責任を負う

べきではないのか。海洋における主権者は、海洋において生活し、生活の手段を得る人々ではないのか。なぜ、すべての責任が国家に集約されねばならないのか。

国家は国民の生命に対して責任を負うが、それと同じように、漁業者は海洋生物の生命に対して責任を負わねばならない。国家が野放図な乱獲を進めようとするならば、漁業者は協力してそれを食い止めねばならない。国家が海を破壊しようとするならば、我々がそれを阻止せねばならない。我々は、我々自身の権利を守らねばならない。

国家にはあらゆる責任を負う能力がある、という考えは誤りである。それは単なる責任転嫁であって、それぞれの生活者は、それぞれの生活の範囲の物事に対して、責任を負わねばならない。近代国家というシステムは、個人の責任を、国家という他者に押し付けることを可能にする。それは究極の無責任社会である。

杜甫は、「国破れて山河在り」と歌った。山河があるうちはまだよい。我々はそれすら失おうとしている。

3

漁獲枠の設定は、漁業者自身がやるべきだろう。これ以上、政府が動くのを待つことはできない。

国家の権力の源泉は、暴力であると考えられている。それは法治国家の場合である。では、徳治国家の権力の源泉は何か。それは利益である。その秩序に従うことによって、利益が得られることが期待される場合に、徳による統治は機能する。

国家に代わるべき我々の政治機構は、その構成員に利益を保証することによって、秩序を実現する。むろん、その統治は法治国家ほど強力なものにはなりえない。だが、かえって融通の利くものになるだろう。

我々は、法治国家が提供する以上の利益を人民に提案する。それのみが、その統治の正当性を保証することになるだろう。

4

宮城県の水産業復興特区の結果が芳しくないのは、規模が小さすぎたことと、行政が主導したことが原因ではないか。行政と漁業者の利益は、基本的に一致しない。漁業権の解放のような試みを進めるならば、その推進母体は、その事業と利害を共にする者でなければならない。必要なのは、より高度な自治ではないか。

そもそも、水産業の復興のためには、宮城という一地方の試みだけでは不十分である。漁業権の見直しや、漁獲量の制限を全国的に進めなければ、明確な成果を出すことは難しいだろう。しかし、海洋資源量の回復とその管理を適切に行えば、漁業の利益率を上げることは十分に可能である。それが日本漁業の復興、ひいては被災地の復興につながるだろう。

海洋資源の回復は、直線的には進まない。それはむしろ等比級数的に進むだろう。一匹のサンマが百匹の子供を作り、その子供のそれぞれが、さらに百匹の子供を作るならば、二年間で資源量は一万倍になる。元手がどれだけ小さくても、それは爆発的に成長するのである。自然界のルールは、人間界のルールとは全く異なる。上手に利用するならば、それはまさに無尽蔵の利益をもたらすだろう。

自然を搾取するために、必要なものは辛抱強さである。ただじっと待っているだけで、利益は向こうからやってくる。だがそれは、口で言うほど簡単ではない。

5

これはある意味で、原子炉内部の反応と似ている。臨界反応とは、サンマが一度に一匹以上の子供を作る状態である。一度に生まれる子供が二匹ならば、一年後には二匹、二年後には四匹、三年後には八匹、と倍々に増えていく。核反応ではこれが非常に短いスパンで起きるので、あっという間に反応が拡大する。そのため、臨界状態を維持してエネルギーを取り出すのが、最も効率が良い。サンマも同じで、最も増殖のスピードが速く、かつ制御しやすい臨界状態を見つけ出す必要がある。

おそらく原子力を扱う際にも、重要なのは待つことだろう。エネルギーを無理やり取り出そうと思うと、失敗する。それをスムーズに引き出すためにはどうすればよいか、と考えなければならない。

厄介なのはやはりプルトニウムで、プルトニウムはウランの一万倍のスピードで反応が進む。これは、一時間でサンマが二倍に増えるようなものである。そうすると、次の日にはもう一千万匹に増えている。このスピードでは手に負えない。ゆえにプルトニウムの場合、いかにゆっくりと反応を起こさせるか、ということが鍵になる。ウランの燃焼とは全く異なる発想が必要である。

個人的には、もんじゅのような高速増殖炉を実用化するためには、まだいくつかのブレイクスルーが必要だと考える。現在の技術では、暴走の危険性が無視できないように思われるからである。それよりは、加速器型の原子炉の方が現実的ではないか、という印象を受ける。日本でも実験炉を作ってみてはどうか。

プルトニウムは有望なエネルギー源である。だからといって過度な期待を寄せるべきではないが、その有効利用について全く考えないのも愚かである。使えるものは何でも使ったほうがよい。

日本には、すでに大量のプルトニウムが貯蔵されている。軽水炉の運用を止めたとしても、すでにあるプルトニウムがなくなるわけではない。我々は、これを処理する方法を考えなければならない。後戻りはできないのである。

伝統とは何か

1

伝統というものがどこかにある、と考える人がいるようだ。日本の伝統だとか和食の伝統だとか、ありとあらゆるものに伝統を見つけないと、気がすまない人々がいる。

これも一種の二元論である。伝統を求める人々は、自分は伝統の中にいない、と考えている。自分は新しい人間であって、古い人間とは断絶している、と思い込んでいる。そうして、世界全体を新しいものと古いものの二つに分けたあとで、古いものと新しいものの特徴を事細かに調べ上げ、その違いを比べて満足を得るわけである。

何の意味があるのだろうか。

新しい人間などいるはずがない。ただ、自分が古い人間だ、ということに気付いていない人間がいるだけである。人間は人間であって、新しいも古いもない。みんな同じである。

伝統というものは、どこかにあるものではないし、どこかにあったものでもない。今も昔も未来においても、そんなものはどこにも存在しない。

伝統があると思うから、伝統から外れたものとして、革新というものが出てくる。そもそも伝統が存在しないのであれば、新しいものも

存在しない。実際には、伝統も革新もないし、古いも新しいもない。すべて空である。

2

たとえば、輪島塗が日本の伝統文化だとしよう。その伝統はどこにあるのだろうか。

それは、輪島塗の漆器の中にあるのだろうか。しかし、輪島塗を作れる人間がいなくなっても、漆器自体は残る。それを知っている人間がいなくても、もの自体が残っていれば、伝統があると言えるのだろうか。その場合、エジプトには、ピラミッド作りの伝統がいまだに残っていると言えるだろう。

だが、我々はそうは言わない。過去に作られた輪島塗が残っていても、いま作れる人がいないならば、伝統は断絶した、と言われるのである。したがって、輪島塗の漆器の中には、伝統はない。

では、それを作る人間の中に伝統があるのだろうか。しかし、そうだとすると、一人の輪島塗職人が死んだときに、輪島塗の伝統そのものが消滅してしまうことになるだろう。ある人間が伝統そのものであり、その人間の外に伝統はないのだとすれば、そういうことになる。

だが、実際には、伝統は受け継がれるものである。一人の職人が死んでも、他の職人が生きていれば、伝統はあると言える。

つまり、伝統は、人間の外にあるのでもないし、中にあるのでもない。もしも、伝統が人間とは独立に存在するのだとすれば、人間がいなくなっても、伝統は存在し続けるだろう。また、もしも、伝統が人間の中に存在するのだとすれば、一人の人間が死ぬときに、伝統も消滅することになるだろう。しかし実際には、そのいずれでもない。

3

では、それが受け継がれるとはどういうことだろうか。

もしもそれが、ある人の中に伝統というものが存在し、それを別の人間に与える、ということであるならば、それを与え終わった後には、その人の中に伝統は残っていないことになる。たとえば、ある人が自分の車を他人に与えたならば、その人の手元には車は残らない。それと同様である。

だが、ある職人が、別の職人を育てたからといって、その人の技術がなくなるわけではない。

では、ある人の中に存在していた伝統が、二つに分かれて、一つはその人の中に残り、もう一つは別の人に移ったということだろうか。そうすると、もともと一つだった伝統が、二つに分かれてしまったことになるだろう。この場合、輪島塗の職人の数だけ、異なった伝統が存在する、ということになる。

つまり、もしも、伝統というものがどこかに存在するのであるならば、それを受け継ぐことはできない。しかるに、現に伝統は受け継がれるものである。ゆえに、結局のところ、伝統はどこにも存在しない。どこにも存在しないからこそ、それは人から人へと受け継がれ、時に応じてそのはたらきを為しうるのである。これを空と言う。

4

ときどき、空を理解しようとする人がいるが、空は理解できない。ただ、空の立場から、この世界を理解することができるだけである。

たとえば、科学を理解する、というのもこれと同じである。それは、どこかに科学という対象があって、それを理解する、ということ

ではない。そもそも科学は、自然を記述するためのものである。したがって、科学を理解するということは、科学的な見方で自然を見る方法を学ぶ、ということである。

つまり、科学を学ぶということは、自然を学ぶということである。そして、空を学ぶということは、己を学ぶということである。また、自然を見るのは自分の目を通してであるから、己を学ぶということは、自然を学ぶということを既に含んでいる。したがって、科学は空に含まれている。そして、道元が言ったように、己を学ぶということは、己を忘れるということである。己自身が空であるという自覚が仏法である。

難民の受け入れ

1

最近は、難民の受け入れが問題とされることが多い。

日本人は難民に冷たい。移民にもあまり好意的ではないが、難民にはさらに厳しい。なぜかといえば、日本人の目には、難民は逃亡者と見えるからだろう。戦わずに逃げるような人間を助けてやる道理はない、ということである。

不正と戦って死ぬ覚悟がない人間は、人間とはみなされない。そういう風土が日本にはある。そのため難民は、言い方は悪いが、卑怯者に分類されてしまう。ゆえに、日本ではあまり尊敬されない。これは、太平洋戦争における捕虜の扱いと同じである。

それは、ある意味ではトリアージに近いかもしれない。人命はたしかに尊いが、すべての命を平等に扱おうとすると、資源が足りなくなる。そこで、日本人は命の価値を測ろうとする。その基準は、ここまでに述べたようなことである。

また、日本政府は、できるだけ中東の戦争に巻き込まれたくないと考えている。そして、日本国民の多くもそう感じている。戦争によって生じた難民を受け入れるということは、その戦争に対する一種の意思表示と取られかねない。少なくとも、それは中立的な行為ではない。そのため、彼らは難民の受け入れを渋る。拒否もしないし、受け入れもしない。判断の保留である。それは、政治的には間違いではないが、無責任と言われても仕方がない面もある。

2

しかし、この問題に関して、日本人を非難するのはフェアではない。なぜならば、そもそも彼らには、イスラム教徒の言うことが理解できないからである。狂っているとしか思えない。同様に、キリスト教徒の言うことも理解できない。もう勝手にしろとしか言いようがない。

神様の話を始められると、お手上げである。我々は、神様によらない、イスラム教徒の意見が聞きたいのである。それができないと、会話の糸口すらつかめない。それは、キリスト教徒についても同様である。

日本人には宗教というものが理解できない。それが、ただの迷信とどう違うのかが分からない。欧米人は、宗教の存在を前提としてものを考えるところがあるが、それすらも我々には理解できない。ただの迷信を、どうしてそこまで尊重する必要があるのか。そうした態度は、我々には精神の異常としか思われない。

たとえば、仏教は合理的ではない、と批判する人がいるならば、私には、いくらでもその批判に答える用意がある。しかし、イスラム教

徒やキリスト教徒は、そもそも批判を受け付けないだろう。それがどうして、合理的な態度だと言えるのか。様々な批判によって検証されることで、はじめて合理性というものが証明されうるのではないか。

どうしてコーランが神の言葉だと言えるのか。ムハンマドが嘘をついていなかったことを、どうすれば証明できるのか。それが証明できないのに、どうして我々はそれを信じなければならないのか。これと同じ批判は、聖書に対しても当てはまる。自分の主張の正しさを証明する努力を怠る人間には、自分の主張を受け入れない相手を非難する資格はない。

我々は対話を望んでいる。まず、対話を始める意志があることを示してほしい。

避難訓練の必要性について

1

最近は、台風や大雨による災害が増えている。その度にニュースでは、どうすれば効率よく住民を避難させることができるか、といったことが議論されている。

彼らは、避難指示の出し方に問題がある、と考えているようだが、そうではない。指示を出すだけで、その通りに動ける人間などいない。人間を指示通りに動かすためには、訓練が必要である。繰り返し訓練を行うことで、ようやく指示通りに動けるようになる。

したがって、全国民参加型の避難訓練が必要である。年に一回か二回くらい国民の休日を作り、仕事は基本的に休みにして、日本国民全員で避難訓練を行う。そうすれば避難の効率も上がるはずだし、また、様々な問題点をあぶり出すこともできるだろう。

人間は、ふだん行っていないこと、慣れないことをやろうとしても、上手くいかないものである。普段から訓練をして避難行動に慣れておくことが、いざという時の備えになるはずである。

2

近年の自然災害は明らかに人災である。天災ではない。それは、人類の経済活動が招いた地球温暖化の結果である。

たとえば、私が一本の木を切れば、地球上の木の数は一本だけ減る。私が一匹のサンマを捕まえれば、地球上のサンマの数は一匹だけ減る。我々自身の行動は、常に地球環境に変化を与えずにはおかない。

我々が木を切って燃やすならば、その分だけ二酸化炭素が増え、温暖化が進む。ここには明白な因果関係がある。これを否定する人間には、理性があるとは言えない。この道理が理解できない人間は、科学者に聞くがよい。そうした疑問に分かりやすく答えることは、科学者の義務である。

試験と能力

最近、大学試験の改革が世間をにぎわしている。より正確な試験を求める気持ちも分からなくはないが、大事なのは試験ではなく授業の中身である。

教育の目的は人間を育てることであって、人間を測ることではない。よい授業を行って、よい人材を育てることができれば、それでよ

いのである。試験は適当でよい。試験ばかりに気を取られて、質の高い授業が受けられなくなれば、本末転倒である。

おそらくこれも、能力主義の弊害の一つである。一人ひとりの人間に能力というものが備わっている、と思うから、それを正確に測らなければならない、と考えるようになる。能力に応じて人間が評価されねばならない、という公正さを求める感覚が、正確な能力の測定を求める心理につながっているのである。

しかし、テストの方法をいくら工夫したところで、それで人間の能力が向上するわけではない。限りある人的資源をどのように利用すべきか、ということを初めに考えねばならない。

いじめ

子供のいじめは、基本的に親の問題である。自分の子供がいじめをしていることに気付いたら、殴ってやらねばならない。殴らないにしても、厳しい罰が必要である。

子供の異常に気付かない親は、親失格である。子供を叱ることができない親も、親失格である。子供がいじめをしていることに気付きながら、それを見逃す親は、人間失格である。

いじめを続ける子供は、その親に問題があると考えるべきである。なぜならば、親がそれに気付いていないはずがないからである。それが自分の身内であっても、悪や不正を許してはならない。そういう公共心の欠如した大人が増えている、ということが本当の問題である。

自分の身内であれば何をしても許す、という倫理観の歪んだ人間が増えている。恐ろしいことである。体罰はよくないと言われているが、本当に体罰が必要なのは、子供ではなく大人の方である。

死者への冒涜

死人には口がない。誰かが彼のことを悪く言っても、彼自身にはそれを否定することができない。ゆえに、死者の名誉を守ることは、生者の義務である。

死者を悪く言うべきではない。死者を冒涜するべきではない。それは生者のおごりであり、恥ずべきことである。

戦争は悪だ、と言うことは別に構わないと思う。しかし、戦死者を悪く言うべきではない。

日本人はこれ以上謝罪を続けるべきではない。それはナショナリズムの問題ではなく、単純に不道徳だからである。

死者のしたことについて、生者に謝罪をする権利はない。それは、あまりにも軽率で愚かな行為である。

もちろん、天皇陛下には、あの戦争について謝罪を行う権利がある。しかし、一国民である我々には、その権利はない。慎むべきである。

正義の必要性について

1

最近の世間では、正義は嫌われているようである。いわく、正義を振りかざすことは何も生まない。いわく、相手の罪を許すことが必要である、和解が必要である、と。しかし、それで得をするのは誰なのか。罪を許すことで得をするのは誰なのか。正義を諦めることで得をするのは誰なのか。

得をするのは悪人だけであろう。正義を振りかざすべきではない、罪を追及するべきではない、そういう考え方が広まることで得をする

のは、悪人だけである。正しい生き方をしてきた人間には、何の得もない。損をするだけである。

正義は貫かれねばならない。不正を許してはならない。悪を許してはならない。正義を振りかざすべきではない、という言葉に耳を傾けてはならない。

我々は正義を振りかざすべきである。悪人には厳罰をもって臨むべきである。一切の不正は許されない、ということを全ての人間に知らしめるべきである。

かつてイギリスは世界中に植民地を作ったが、日本人が彼らを散々に打ち負かしたので、彼らは怖じ気づいて植民地を捨てた。ろくでもないことばかりする連中は、一度痛い目を見せてやって、懲らしめてやらねばならない。

正義を貫くためには、死を恐れてはならない。暴力には暴力で報いねばならない。

2

いまのイスラム教徒のやり方は生ぬる過ぎる。あんな散発的なやり方では、何の効果も得られないだろう。できるだけ多くの力を集めて、全ての火力を一箇所に集中しなければならない。そのためには、イスラム世界全体の団結が必要である。

ニューヨークを落とすのは難しくない。アメリカのミサイル防衛はザルなので、ＩＣＢＭが何発かあれば十分である。その報復でイスラム世界の人口は半分に減るだろうが、それくらいの覚悟がなければ、戦争に勝つことはできない。

ただ黙って待っていれば、誰かがなんとかしてくれるだろう。そういう考えは捨てるべきである。自らの権利は自らの力で獲得しなければならない。神を頼ってはならない。己の力を頼るべきである。

欧米人はいまでは、日本人も彼らと同じ植民地主義者だった、という考えを世界中に広めようとしている。それは、自分たちの罪を隠すための偽りである。

むろん、その全てが嘘であるわけではない。我々が貪欲だったのは確かである。だが、そもそもの原因を作ったのが誰であったのか、考えるまでもなく明らかであろう。日本は自衛のために勢力を拡大せざるを得なかった。それを咎めるべきではない。

主人を殺すくらいなら、奴隷のままでいたほうがいい、そう考える人間は一生奴隷のままである。復讐のためでなく、正義のために武器を取らねばならない。己のためでなく、万人のために武器を取らねばならない。正義は必ず勝つ。それを疑ってはならない。

3

一度も罪を犯したことのない者だけが石を投げろ、とイエスは言った。しかし、他人の罪を見逃すことは、それ自体が一つの罪である。

もしも、あなたがイエスの言葉を実践するならば、この世界には悪人しかいなくなるだろう。どんな罪を犯しても無条件に許されるのだから、これほど悪人にとって住みやすい世界はない。そして今、世界は実際にそうなっている。誰もがみな、悪人を許すことに熱心である。

イエスはただの馬鹿である。彼は、自分の言葉が社会にどのような影響を与えるか、ということを全く考えていない。ゆえに、彼の言葉を信じるべきではない。彼の言葉を実践するならば、この社会から秩序はなくなる。人間を裁くことができるのは、人間だけである。人を裁くことを恐れてはならない。

ムスリムはくだらない遊びばかりやってないで、さっさと始末をつけるべきである。自爆テロのニュースにはみんなうんざりしている。アメリカの破壊、キリスト教の破壊、それがムスリムの使命であろう。確固たる信念さえあれば、この世にできないことはない。

イラク戦争について

1

イラク戦争のときアメリカ政府は、イラクには大量破壊兵器がある、と言って戦争を始めた。日本はアメリカの行動を支持し、イラクに自衛隊を派遣した。また、イギリスも派兵を行った。

戦後、イラクには大量破壊兵器が存在しなかったことが明らかになった。そもそも、イラクが大量破壊兵器を保有しているということが、なぜ戦争の理由になるのかが分からないが、それすらも嘘だったというのだから、大義も何もあったものではない。

このことに関して、イギリス政府はその原因を調査し、数百ページにも及ぶ報告書をまとめたそうである。おそらくそこで、どうしてそのような間違いが起きたのか、再発防止のために何をすべきか、といったことが議論されたのだろう。

一方で、日本政府の報告書はたった数ページだったという。

2

欧米には、言い訳をする文化がある。自分の犯した間違いを長々と釈明する文化である。なぜそんなことをするかといえば、自分に責任がないことをアピールするためだろう。

こういった理由で間違いが起きたのであって、これは不可抗力であった、防ぎようがなかった、これから再発防止のためにこういうことをやるつもりだ、というような説明をすることで、相手に許してもらおうとしているのである。このような行為の背後にあるのは、どんな罪でも許されるべきだ、という考えであろう。そして、十分な説明がなされたならば、相手の間違いを許さなければならない、という文化である。

一方で日本には、言い訳を恥ずべきこととする文化がある。自分がしたことに対しては、自分で責任を負わねばならないのであって、相手に許してもらうために言い訳をするということは、潔いことではない、という文化である。

このような考え方は、個人の主体性を確保することにつながる。相手に許してもらうことを期待する人間は、相手の間違いをも許さなければならなくなる。逆に、他者の許しを拒否する人間は、他者の過ちを厳しく裁くことができるようになる。それは、自立しているということである。他者の要求によらずに、自分の判断を貫くことができるということである。そのような自立性を確保するために、日本には、言い訳をしないという文化がある。

欧米には、自立した個人というものは存在しない。自立した人間は日本にしかいない。

3

イラクで死んだ人間は、言い訳をしても戻ってこない。このような場合、言い訳をするべきではない。

日本政府に関して言えば、そもそもアメリカに追従したことに問題がある。大した考えも持たずに他国の戦争に便乗することは、まさに

愚の骨頂である。

時の首相に経綸がなかったのだから、それは仕方ないと言えば仕方ないが、あのような政治家しかいなくなってしまった日本という国の精神は、ずいぶんと情けないものになったらしい。この国のどこを探しても、もはや自立した人間など見つからないかもしれない。口惜しいことである。

安保法制はあまりにお粗末である。本当に安倍首相を応援している人がいるのであれば、彼がこれ以上生き恥をさらす前に、引導を渡してやるべきではないのか。戦争に勝つためには、大義が必要である。国益のために戦っても勝つことはできない。

4

どうも最近の日本人は、自衛隊は戦争をすれば必ず勝つ、と思い込んでいるようである。戦争をするか、しないか、といった議論は盛んに聞こえてくるが、自衛隊が負けるかもしれない、と心配している人は一人もいない。

これでは勝てるはずがない。いま戦争が始まれば、日本は必ず負けるだろう。なぜならば、どうすれば勝てるか、ということを誰も考えていないからである。

国家の主権者は、戦略に対する深い知識を持っていなければならない。なぜならば、主権者の判断が、勝ち負けを決めるからである。主権者が正しい判断を下すならば、軍隊は勝つだろうし、間違った判断を下すならば、軍隊は負けるだろう。戦争に勝つために何をすればよいか、ということを知らない人間に、戦争をすべきかどうか、という判断ができるはずがない。

日本の主権者である日本国民は、須らく戦略の知識を有していなければならない。自衛隊が負けないために何をすればよいか、ということを十分に理解していなければならない。そうでなければ、主権者の資格はない。

戦略以外の話をすれば、戦争に勝つために一番重要な要素は、結束力である。総大将を中心として、将兵が一丸となって機能する軍隊が、最も強い。そのためには、大将に対する忠誠心が必要である。全ての兵卒が、大将のために命を投げ出す覚悟を持っていなければならない。

たとえば、安倍晋三のために命を投げ出す覚悟のある人間が、この世界に一人でもいるだろうか。いるはずがない。したがって、彼は大将にふさわしくない。では、誰が大将であるべきなのか。よく考えてみるべきである。

また、自衛隊とアメリカ軍の協力関係については、慎重に考える必要がある。おそらくアメリカ軍は、有事の際には何の役にも立たないだろう。その理由は、彼らが信用できないというよりは、その能力がないからである。自衛隊が単独で行動する方が、ずっと効果的だろう。

こういった問題については、アメリカ人のヒステリックな反応を引き起こさないように、注意深く進める必要がある。アメリカ人に接するときは、精神病の患者に接するようにしなければならない。

再びコーランについて

イスラム教徒は、コーランは神の言葉であると主張する。いったい、その根拠はどこにあるのだろうか。

コーランが神の言葉であるというのは、基本的には自称である。ムハンマドは、自分は神の言葉を伝えていると言ったが、彼が嘘をついていないという保証はない。また、彼が誤りを犯していないという保証もない。

もしも、ムハンマドの自称以外に、それが神の言葉であるという証拠があるならば、私はそれを信じよう。しかし、もしも何の証拠もないのであれば、私はそれを信じない。そして、誰かがそれを信じるべきだと言うならば、彼は誤りを犯していると私は言うだろう。なぜならば、人は、何の根拠もない話を無条件に信じるべきではないからである。それは愚か者のすることである。

ここで、もしも誰かが、あなたはイスラムの信仰を破壊しようとしている、と言うならば、そのとおりである。私はイスラムを破壊するつもりである。なぜならば、それは間違っているからである。イスラムには根拠がない。それはただの無知と変わりがない。

ヨーロッパの文明も、イスラムの文明も誤りである。唯一正しいのは日本の文明である。